

5 龍勢（流星）について - その2

1) 龍勢の起源について若干の考察

- イ) 龍勢を何時、何処で、誰が、何の為に打上げるようになったかは、学術的、実証的な調査はなされておらず、今の所不明な部分が多い。
- ロ) 今のような形の龍勢が祭礼のイベントとして行っている地域は、当草薙以外に藤枝市岡部の朝比奈龍勢、埼玉県秩父市の吉田龍勢、滋賀県の米原流星等です。
- ハ) 龍勢の起源や発祥地は不明ですが、文献的に「龍勢」乃至「流星」と言う言葉が出てくるのは、明治5年棕神社（秩父市吉田町）社司田中千弥日記に記述され、更に明治24年（1891年）の同日記に棕神社祭礼時に大龍勢30本余打上げ云々と記述している。火薬調合を含め、打上げ技術は一朝一夕に出来るものではないので、少なくとも明治5年以前、江戸時代の何時の頃からか棕神社近辺の地域で打上げられていたものと思います。
- ニ) 草薙神社の祭礼に龍勢が献納された事を明確に記述している資料は、明治44年草薙在住の伊藤市太郎日記です。「9月20日は本村神社の祭典、流星、打揚の両煙火有り、流星の分は14本云々」と草薙神社の祭典に龍勢が華々しく打上げられた様子が記されています。
- ホ) 草薙や朝比奈龍勢の他に、今は行われていないが、龍勢（流星）を揚げたと伝承されている地域として竜爪山や梅が島の入島、竜爪山西麓の郷島、賤機山等がある。これらの龍勢は大正期や戦前までは打上げられていたようです。
- ヘ) 龍勢に関する資料として認められている事項は、詳しく調べればもっとあると思います。次ぎに述べる起源や発祥に関する事項は伝承や想像によるものです。
 - a) 滋賀県米原地方に伝わる龍勢（流星）の起源は、流星伝承では、慶長5年（1600）の関が原の合戦で西軍石田三成方が味方同士の連絡方法として火薬推進による狼煙を使ったのが始まりで、土地の農民がそれを覚えていて、そこから工夫、発展したものが今の流星としています。今の形として確立したのは、江戸時代後期以降ではないでしょうか。
 - b) 草薙神社を中心とする地区が神社に龍勢を奉納した時期は先に記した通りですが、花火を打上げた記録は文化13年（1816年）船越村の若者が「花乱星」と言う花火を打上げ、多く失敗したと言う「船越村名主日記」があります。これらの花火がいつ頃「龍勢」に発展したかは定かではありませんが、口伝では19世紀後半の安政年間に龍勢の奉納が行われたとも伝えています。又、更に古い伝承では、駿府城に隠居した徳川家康公が慶長18年（1613）お城で花火を見物したと伝えられており、その頃既に娯楽としての花火が行われていたことが想像されます。つまり、16世紀中頃種子島に鉄砲が伝わると共に、戦国期を通じ火薬の製造が盛んになり、それまでの古典的な煙による狼煙から、風雨に影響されずより高く上げ

られる、火薬を利用した「のろし」が考案され、徳川幕府による平和到来と共に17世紀以後、火薬の平和利用として花火が考案され、無病息災、五穀豊穡等の神仏への信仰と結び付き、農民の間で盛んに花火が打上げられた記録や伝承は日本各地にあります。特に、三河近江地方の祭礼と結び付いた花火が、江戸時代から明治にかけて製作や打上げ技術が各地に広まり、その技術が草薙神社を中心とする有度地区の村々、安倍川流域の郷島、横山、平山地区に伝わったものと思えます。この花火技術が龍勢（流星）へと発展した経緯は未だ解明されていません。

- c) 余談として、秩父吉田龍勢の起源伝説を記述します。棕神社の縁起（由来）によると次のような事が記されています。

「日本武尊が東征時、吉田に来た時、持っていた鉾から光が発した。この様子を後の世の人々が光を飛ばす行事として、昔から神社の前の吉田川原で大火を燃やし、その燃えさしを取り力の限り投げ上げて飛ばし、光を放ってご神意を慰めたが、火薬が発明されるやこれを使って火花を飛ばした。その後追々工夫し龍勢となった。夜見る時は星が飛ぶ様に見えるので流星と書き、昼見る時は雲の中に龍が昇る様に見えるので龍勢と書く」

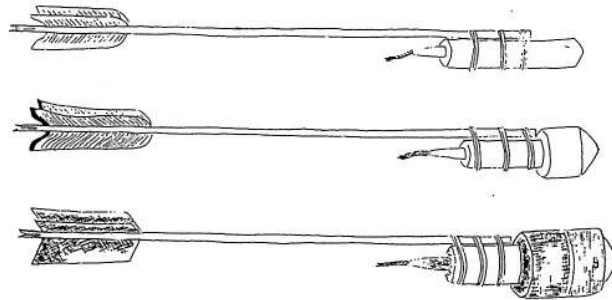
草薙も昼打上げを龍勢と呼び、夜打上げを流星と呼んでいます。

2) 龍勢花火の昔と今について

- イ) これまで記述したように龍勢の起源ははっきりしませんが、火薬の伝来、発達に伴ない、戦国期の狼煙からヒントを得て、平和な江戸期に到り火薬を使い慣れている鉄砲師、砲術家が花火を考案し、秋の収穫を祝う祭礼や五穀豊穡、無病息災を願う祭礼を太古の昔から行って来た農民に伝わり、スリルや娯楽性とも相俟って特に農家の若者の間で祭以外でも盛んに花火が上げられる様になったようです。
- ロ) 草薙地区でも江戸中後期、若者による花火（からんせい等）が盛んに打上げられていましたが、この「からんせい」花火を打上げる筒（木砲）が草薙神社に展示保管されています。これらの木砲が草薙だけではなく、有度山麓の村々や安倍川沿いの村々にも残存している事は、有度山麓、竜爪山麓、安倍川とその支流の村々で祭礼時の奉納や娯楽として楽しまれていたことが伺われます。
- ハ) 合図や連絡の為に戦国期に発達したのろしは、恐らく竹筒や木をくり抜いた孔に火薬を詰め込んで点火爆発力を利用して上昇させたものと思いますが、のろしとしての本来の役割を失った平和な時代（江戸時代以後）に到り、竹筒や木筒を火薬でより高く飛ばすと言う技術を伴う遊びに変化したに違いありません。
- 古老の話によると、子供の頃（大正時代）竹の数節を削り取り火薬を詰めて飛ばす「イキッキリ」と呼んだ花火遊びをよくしたものだと言っています。この事は、大人が作っている大きなもの（長いもの）を見様見真似で小型のものを作って遊んで

いたことが伺えます。

- 二) 明治 11 年静岡宮ケ崎の山村音吉と言う人が「荻野流煙火の仕法帳」と言う色々な花火の作り方を書いた秘伝書を持っていましたが、この秘伝書は明治 23 年吉川の奥山和作と言う人の所へ渡っています。この秘伝書の中に「流星仕立の図」として龍勢の作り方が描かれています。これは下の図のようなものです。この資料による明治 11 年以前からこのような龍勢花火が広がっていたことが分ります。



- ホ) 上の絵からも分るように龍勢とは、火薬推進式のろしの進化型花火とからんせい等の打上げ花火が合体、進化した花火と言えないだろうか。
- へ) 現在のような尾羽根の無い龍勢になったのは、明治 44 年頃からで昭和 8 年爆発事故を起したり、戦争等で 20 年間龍勢を打上げなかったが、昭和 28 年復活し以後 3 年毎に神社祭礼時に献発していました。昭和 58 年「草薙神社龍勢保存会」が結成され翌年龍勢の製作保存伝承に対し「静岡県無形民俗文化財」に指定されました。以来毎年草薙神社の 9 月例大祭時に昼夜 30 本前後の大龍勢が献発されています。
- ト) 日本人は太古の昔から太陽、月、火、水、山、川等人間の力の及ばない所に神々が宿ると考えていました。神の力が宿り、人々の精神的な拠り所として色々な神を祭る神社が建立されました。そこに雨乞い、日乞い、害虫除け、病魔除け等々農耕や健康を害する事が起こった時、村人は氏神のおらが神社にお参りし、花火を打上げ祭典を盛んにして、五穀豊穰、無病息災を祈願しました。

科学技術が発達し、あらゆる事象の原因仕組みが分るようになった現在、昔のような信仰形態は無いものの、心の拠り所として正月や何かの記念日に家族の健康や安全を祈る事はよくあることです。現在、草薙神社に龍勢を奉納、献発する行事は、その様な精神的な思いを込めているものです。勿論、お祭なので華やかに盛大に楽しく観る人に感動を与えるように、花火の仕掛けに毎年色々工夫しています。

しかし、文化財なので基本的な作り方はは変えられません。ロケットの様に進化させる訳にはいきません。あくまで一つ一つの部品は手作りです。

3) 龍勢と地域住民との関わりについて

龍勢保存会の会員は草薙を中心とした有度地区居住の人々によって構成 (200 名) さ

れています。この人達の中には子供の時からお祖父さんや父親に龍勢作りを教えて貰った人達もいます。又、山に竹取りに行く時や火薬詰めをする時等、会員以外の会員が住んでいる自治会地区（草薙神社氏子7自治会）の人々が応援参加して共に龍勢作りを楽しんでいます。龍勢を作るには火薬等お金が掛ります。その為、地域の人々や会社、商店の方々から寄付金を頂いて協力して頂いています。

有度1小や2小の5年生の生徒さんに地域に関わる授業の一環として龍勢に必要な大小落下傘を328個作って貰い、龍勢の作り方や歴史もその時説明しています。また龍勢祭りの時、木遣り道中隊を組んで草薙駅から神社まで練り歩きますが、その時唄う木遣り唄の指導もして、保存会員と5年生の生徒が一緒になって唄いながら練り歩きます。龍勢を打上げる直前にこの龍勢はどうゆう目的で打ち上げるかの説明（口上）をしますが、その口上唄も小学生が唄う場合があります。

祭そのものは、地域の自治会長、氏子総代会、保存会によって構成する実行委員会が主催します。マイナーなお祭ではありますが、草薙神社を中心とする地域ぐるみのお祭りです。保存会員が所属する支部で1～2本の龍勢を作りますが、それぞれ成功を目指して（龍勢を300m程打上げ、そこから変化（へんげ）花火を工夫通り打出す事）技を競うのです。全て手作りなので失敗するケースもあり、30秒程度の龍勢花火ですが2ヶ月前くらいから成功を夢見て工夫と努力をしています。

4) 伝統の良さについて

伝統とは長い歴史を通じて培い、育み、伝えて来た風習、文化、技術、芸術、思想、学問、信仰等残っている良き物と思いますが、龍勢の場合、前述の様に民衆特に村人の中で信仰や娯楽と重なり合って発展、支持されて現在に到っています。その意味で精神文化を具現化した民俗文化財と認められたものと思います。

何代にも亘って営々と続いて来た手作りの技を通して、地域の人々が知り合い、親睦を深めていることは、少子高齢化の中で孤独死や親子の情愛、隣人との付き合い等薄れつつある現状で、龍勢伝統の良さが発揮されていると思います。

一般的には、伝統の良さとは、ある民俗や民衆に永きにわたり支持され光輝いている物、人々の心を潤す物、人々の誇りとなっている物、筋の通っている物、守っていかなくちゃならない物、そう言う物だと思っています。

5) 時代の変化への対応について

龍勢花火の場合、どんな時代になろうとも、竹を使う、黒色火薬を使う、手作りで作るの三原則は変えられないと思います。100%成功させるつもりなら、それなりの材料、技術、製法はあります。多くの仲間と語りいながら、失敗するかもしれないが手間をかけて手で作ることが、成功の喜びを倍化させるのです。

技術の進歩を享受するとすれば、変化（へんげ）花火の部分に取り入れ、花火を華や

かにすること、及び時代の流れへの対応はむしろ、変化に合わせた祭の形態とか組織を対応させることと思います。長きにわたり支持され続けてきた背骨の部分は変えるべきではないと思います。

6) 後継者の育成について

何時の時代、どんな組織でも後継者の育成は欠かせない。龍勢保存会の場合、火薬を除いて、1つ1つの構成部品は全て手作りのため新加入会員には、既に技を習得している人が手とり足とり教えるしかありません。勿論、支部毎に秘伝の技があるのでそのマニュアル的な図面なり、仕様書的な物もあります。一通り覚えるには3～5年掛るように思えます。打上げた龍勢の成功、失敗に関わらず、その結果の技術発表会を必ず行います。各龍勢の製作データも収集して発表しています。

重視しているもう1つは、前述の小学生に対する取組みです。子供の心に龍勢の事が少しでもインプットされていれば、龍勢は永続すると確信します。

以上/保存会長 三浦 明